クレマチス

●分類：キンポウゲ科つる性多年草

●学名：*Clematis* hybrida

●和名：クレマチス

●原産地：北半球の温帯域中心に 250～300 種が自生

特徴：ギリシャ語の Klema(つる、巻きひげ)が学名の由来になっていますが、アサガオやブドウのように巻きひげによってよじ登るのではなく、葉柄が支柱などにからみつきます。クレマチスの魅力は花が変化に富んでいることです。花といっても花弁に見えるのは、萼片(がくへん)が変化して色がついたもので雄しべとのコントラストも見どころです。葉の形や草姿も様々で、また、花後にできる球状の果実も面白い形をしており、花材にもなります。多くはつる性の落葉植物ですが、木立性や常緑のもの、芳香性のものもあり、花期も四季にわたります。この多様性が魅力です。

苗の選び方：さし木をして一年以内の一年生苗、一年生苗をもう一年育てた二年生苗があります。よい芽があり、枝がしっかりしたもので、鉢底から根が出ているような株を選びます。二年生苗の方が値段は少し高いですが、初心者の方にはおすすめです。

植え付け：クレマチスは丈夫ですが、幼苗は弱いので、１、２年生苗は一年間鉢で育てて、丈夫にしてから、庭やコンテナに植えかえます。

鉢植え；鉢に植える場合に、クレマチスは根が傷みやすいので、土と根をなじませるために、竹箸などで用土を突き入れたりしません。植え付け終了後、２～３回鉢をトントンと地面に打ち付けて、根と土をなじませます。２年に１回は、一回り大きな鉢に根を傷めないように気を付けて植え替えしましょう。

庭植え；２年以上の株を真夏以外ならいつでもいいですが、できるだけ休眠期(冬～早春)に植え付けます。半日以上日が当たるところに、花を眺める方向に空間ができるように配慮して植えます。株元に直接日が当たると地温が上昇し、夏の間に根が弱ってしまいますので、株元を覆う一年草などを植えると、土の乾燥も防ぎ、泥はね防止にも役立ちます。移植するとダメージが大きいので、よく考えて植えましょう。地中に１節以上入るように深植えします。立ち枯れ病が発生しても、また地中から再生しますし、複数の芽が地中から出ますので、枝数が増え、早く株立ちになります。

剪定の仕方：剪定をして株作りをしないと１本の枝が伸びるだけで、花数も少なく、間が抜けた感じの株になってしまいます。また、生育の仕方によって剪定の仕方は異なります。旧枝咲き―前年伸びた枝(旧枝)の各節から新芽を１～３節ほど伸ばして咲かせるものは、一季咲きの性質が強く、生育を始めるとすぐに咲くので、４月中旬から５月中旬と早咲きで大輪のものが多いです。このタイプのもの(モンタナ系、シルホサ系、ユンナンエンシス系など)は花後に弱剪定または無剪定。新枝咲き―前年伸びた枝は大半が枯れ、地際や地中からの新芽が 10 節ほど伸びてから、節々に花をさかせるもの(テキセンシス系、ビオルナ系、ヘラクレフォリア系など)は、多くは 5 月下旬から咲き始め、四季咲き性が強く、花後に強剪定(強く切り詰める)と再び花が見られます。剪定を繰り返すと、秋まで３～４回花を楽しめます。新旧両枝咲き―前年伸びた枝の各節から、新芽を５～8 節ほどのばして花を咲かせ、今年伸びた枝(新枝)にも花を咲かせます。5 月頃から咲きだし、四季咲き性がありますこのタイプのもの(多くの四季咲き性大輪種、タングチカ系、テッセンの改良種など)は、花後早めに剪定することで、年に２～３回花を見ることができます。剪定の仕方としては、強剪定でも弱剪定でもよい任意剪定になります。

殖やし方：さし木が一般的です。ほかに実生、接ぎ木、つる伏せ、取り木などの方法もあります。

さし木は比較的簡単で、適期は 4 月下旬から 8 月上旬までです。今年伸びた枝の少し硬くなったところを鋭利なかみそりなどの刃物で、節がつぶれないように 2 節つけてきれいに切り、下の節の葉は切り取り、挿し穂とします。

病虫害：うどんこ病、葉枯れ病、白絹病、立ち枯れ病などが発生しますので、トップジン M 水和剤、トリフミン水和剤などの殺菌剤を散布します。アブラムシ、ナメクジ、ヨトウムシ、シャクトリムシなどが発生しますので、捕殺したり、スミチオン乳剤、オルトラン水和剤、バロックフロアブルなどの殺虫剤を散布します。